

鷺山公園の自然環境を 活かした再整備構想

平成 30 年 4 月

鷺山自治会連合会
鷺山桜の会
鷺山まちづくり協議会

◆鷺山公園の自然環境を活かした再整備構想◆

1. 鷺山公園の経緯

鷺山は、土地所有者が複数ある入会林として利用され、主に薪炭林として、周辺住民の燃料の供給、當農の肥料となる堆肥の原料(落葉等)を供給する場所として活用されてきた。その後、家庭でのエネルギー利用等生活スタイルの変化と共に、薪の利用が減少し、鷺山が薪炭林の供給源としての役割を終えた。薪炭林として活用されていた時代は、地域住民が総出で鷺山の森の整備(伐採等)が進められていたが、その必要がなくなった後は、次第に鷺山の森は放置され、自然の流れのままに樹木が生長し、極相林であるアラカシ、ツブラジイ等が多くを占める常緑広葉樹が広く分布するようになった。

そのように鷺山の森が変化をする中、薪炭林としての役割から『地域の憩いの場』として自然や歴史を身近に感じることが出来る『森林公園』としての役割に転換を図るため、土地所有者、自治会関係者をはじめ地域住民が中心となり昭和 59 年 9 月に『鷺山桜の会』を結成し、桜の咲く美しき山を目指し、ソメイヨシノをはじめとしたサクラ類や紅葉を楽しめるカエデ類を鷺山各所に植樹を行い、地域全体で育てる鷺山を実践すると共に、『森林公園』としての指定を求める活動を推進していった。この様な住民活動を経て、平成 12 年には、鷺山公園として指定され位置づけが明確になり、地域住民の憩いの場として活用されるようになった。

地域住民の憩いの場として活用される一方、土地の形状、良好な景観を背景に、マンション等住宅開発案件が発生するなど、地域住民にとって生活環境を大きく変化させる事案が発生する危険もあった。そのため、鷺山公園周辺の住環境を保全し、鷺山公園の景観価値を維持するためにも、この様な案件が発生しないように、鷺山公園及びその周辺を第 1 種風致地区及び第 3 種風致地区に指定し、自然環境及び生活環境の保全を図るよう働きかけ、平成 21 年 3 月 20 日に風致地区の告示が行われた。

その後、年月が経過する中で、植樹したサクラ類やカエデ類の木々も樹高が 10m を超える高木に生長すると共に、自生しているコナラ、アラカシ等の広葉樹も生長すると共に、立木密度も高くなっている、鷺山全体が放置二次林として藪状の森林のエリアが拡大していった。そのような状況の打開を図るために、平成 20 年度以降は鷺山小学校 P T A も協力し、除伐等森林整備活動を進められている。

しかしながら、鷺山桜の会メンバーも高齢化が進む中で、以前のような公園の管理活動が困難になっており、鷺山公園各所で自然環境及び公園機能としての課題が顕在化してきている。

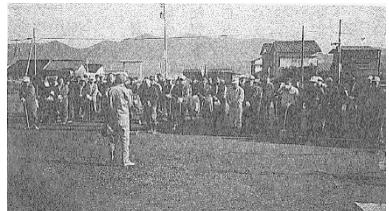


写真 結成当時の鷺山桜の会



写真 現在の鷺山桜の会



写真 P T Aによる整備活動

2. 現在の鷺山公園が抱える課題

①植栽された桜の徒長、樹冠の形状の悪化

昭和 60 年代に植栽されたサクラ類は、約 30 年の月日を経過し、様々な生長を遂げた。その中で、サクラ類が密植された箇所では、徒長した枝が多く、サクラ類が本来形成する大きく広がった樹冠とはならず、多くの枝が鉛直方向に生長してしまっている。この様な樹冠では、各枝で花芽がつきにくく、本来目指してきた美しい花が咲き誇る鷺山公園へと繋がらず、良好な樹冠に生長するように整備が求められる。

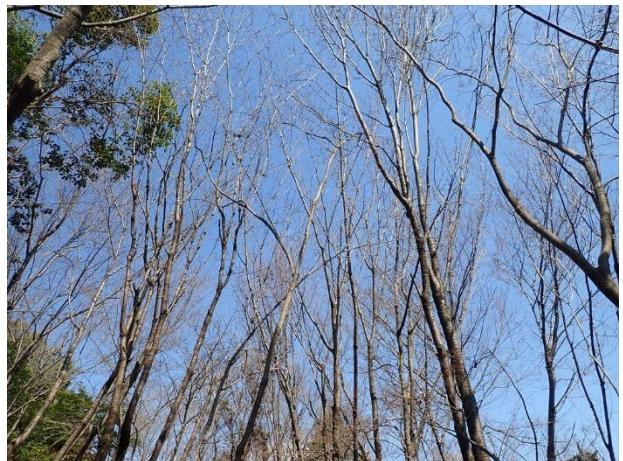


写真 密植されたサクラ類の徒長

②枯死枝が目立つようになっているソメイヨシノ

植栽されたサクラ類の中で最も多く占めているのが、日本を代表する桜「ソメイヨシノ」である。鷺山公園に植栽されたソメイヨシノも、樹齢 30 年を超える個体が殆どで、一部立木では枝の枯死が確認されている。ソメイヨシノ自体は、園芸品種として個体が接ぎ木で増殖されたこともあり、比較的寿命が短く 50 年～60 年程度という説が一般的である。このまま、大量のソメイヨシノを放置しておくと、数十年後に一斉に個体が枯死する状況に見舞われる可能性があるため、枝の枯死等が見られる樹勢の弱った立木については、伐採等の管理が必要である。特に樹勢の弱った個体は、てんぐ巣病等樹木特有の病気の原因となり、鷺山公園全体の桜に影響を与えるかもしれない。



写真 枝の枯死が目立つソメイヨシノ

③立木密度の上昇に伴う眺望及び林内環境の変化

鷺山各所で見受けられるコナラ、アラカシ、ツブラジイといった広葉樹の分布するエリアでは、高木層、低木層の両階層で立木密度が上昇し、見通しの利かない箇所が広く確認されている。この様な状況は、眺望を楽しむための山頂付近の四阿周辺や尾根沿いの散策道周辺でも同様の状況が確認されており、鷺山がもつ眺望の良さが喪失してしまっている。特に、四阿からの眺望は、金華山や古々川の川の流れの跡を確認出来る素晴らしい眺望が期待されているが、現在は周辺が樹木によって閉塞され、その価値を非常に下げてしまっているのが現状である。

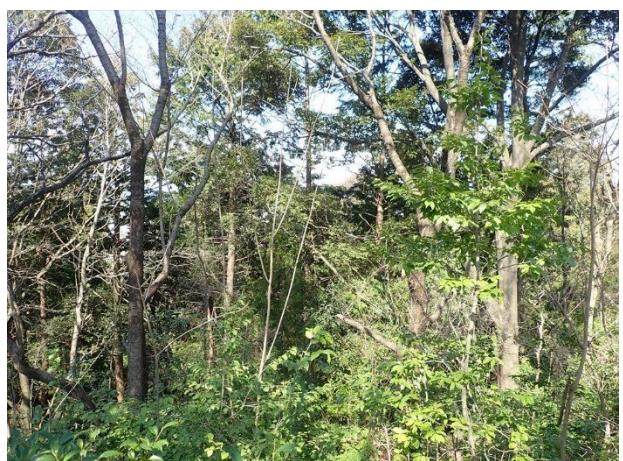


写真 立木密度が高くなり藪状になった森

④モウソウチクの分布域の拡大による自生立木の枯死

鷺山公園では、東側斜面と西側斜面の両方でモウソウチクの群落が成立している。古くは急斜面の土留機能として導入されたモウソウチクが、時代の流れと共に、伐採等の管理がなされず、放置されたことで、その分布域を拡大させている。特に山頂方面への拡大にあたっては、元々自生していたコナラやアラカシ、ヒノキ人工林を呑み込みながらその分布域を拡大させている。



写真 モウソウチクの分布域の拡大

⑤間伐が遅れているヒノキ人工林

鷺山公園では、西側斜面を中心ヒノキ人工林が分布している。拡大造林時に植栽されたヒノキ林ではないかと考えられるが、植栽後の間伐、枝打ちといった必要な管理作業が行われておらず、ヒノキ立木自体が木材としての価値を期待通りには増加させていない。また、間伐の遅れによって、十分な日射が下層部で確保出来ておらず、低木層の樹木の生長が進んでおらず、森林の林相構造としても決して健全な状態ではない。当該ヒノキ林は、鷺山公園内にあることや風致地区指定エリア内であることを考慮すると、皆伐等伐採作業によって出荷される見込みもないことから、生態的に適正な状況が維持されるように、適宜管理する必要がある。



写真 間伐、枝打ち等が遅れているヒノキ人工林

⑥散策路の階段等移動経路の施設劣化

鷺山公園として整備されてから 20 年以上が経過する中、散策路を中心に各所で施設の劣化が見受けられる。散策路の表層土が降雨等による流失により、勾配が変化し滑りやすくなった箇所や、柵工の修繕において、足場パイプ等を活用した仮修繕のままになった箇所もある。利用者の安全な移動や景観への配慮を含めて、点検、維持修繕を行う必要がある。



写真 劣化した階段工



写真 仮修繕の柵工

⑦劣化が進む太子堂

鷺山公園の北部尾根部に建てられている太子堂の劣化が進んでいる。太子堂の基礎部石積のはらみ、樹木の根張りの影響を受けた外構の破損、太子堂本体の経年劣化など、建築物としての強度の問題や基礎部の崩壊の問題など、課題が顕在化している。特に、太子堂が立地している場所は、北方面からの散策路と西方面からの散策路の合流する主要な散策路に位置しており、鷺山公園利用者の安全面からも、対策が必要である。

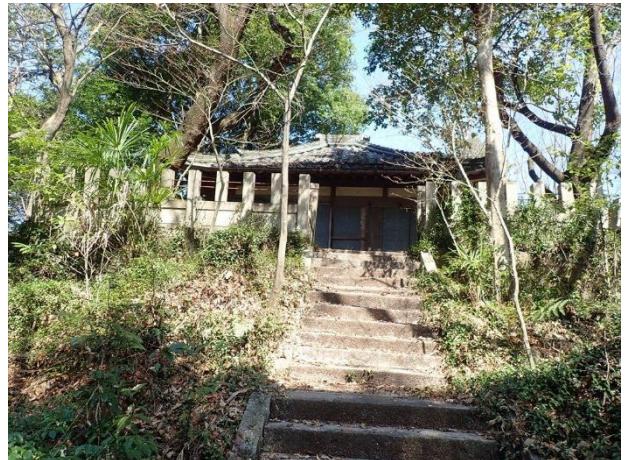


写真 劣化が進む太子堂

3. 鷺山公園が伝えるべき資源

地域住民から愛され守られてきた鷺山公園には、これからも伝えるべき様々な資源が残されている。そのような資源を今後も守り繋げていく中で、よりよい鷺山公園のコンセプトを構築していく必要がある。

①地域住民自らが育ててきたサクラ咲き誇る鷺山公園

毎年3月下旬～4月上旬にかけて、ソメイヨシノを中心に、鷺山公園全体では、最も華やかな季節を迎える、多くの地域住民が花を愛でながら散策等を楽しむ季節である。



写真 鷺山公園で咲き誇るソメイヨシノ

また、鷺山桜の会主催の花見の宴では、地域住民を中心とした毎年200名を超える参加者が集い、交流を深めている。鷺山公園のシンボルとして位置付く『サクラ』を今後も活かして、鷺山公園の魅力を維持していくことが求められる。

②鷺山城址をはじめとした鷺山公園の歴史的魅力

斎藤道三ゆかりの鷺山城址、織田信長室濃姫ゆかりの地、長良川(井川、古川、古々川)の川の歴史など、鷺山公園に関わる歴史的な様々な情報は、地域住民の生涯学習の側面、歴史探訪を楽しむ観光資源としても活用が期待される魅力があるエリアである。岐阜市としてまちづくりの一環として信長ゆかりの地として様々なソフト事業を展開する中で、地域の活性化に繋がる歴史資源を活用したソフト対策が重要である。



写真 鷺山桜の会 花見の宴

地域の活性化に繋がる歴史資源を活用した



写真 鷺山小学校 鷺山学びの森活動

④日常的な利用による健康増進の場

鷺山は標高 68m の単独峰として鷺山の中心部に位置し、散策路の設置状況、適度な標高差など、日々の散歩コースとして活用されることが多い。地域住民の健康増進の側面からは、鷺山公園の散策経路が更に多くの地域住民に活用され、健康寿命が長くなる生活スタイルを位置付ける重要なエリアとして位置付けて、活性化を図ることが長期的な視点からも鷺山全体の活性化に繋がっていく。



写真 地域住民が日々の散歩コースとして活用する鷺山公園内の散策路

⑤鷺山に生息する多くの生物

鷺山公園は、全体が里山で形成されている森林公園という特徴から、様々な生物が生息している。鳥類ではカラ類をはじめとして小型鳥類から、チョウゲンボウ等小型猛禽類も飛翔する姿が見られることがある。また、フクロウの生息も確認されており、鷺山公園が有する資源資源の豊富さを物語っている。また、北野神社南側の鷺山林縁部の草むらを中心に、ヒメボタルの生息も確認されており、5月下旬～6月上旬には、個体数は多くはないものの、その飛翔が確認されている。



写真 鷺山公園を飛翔するヒメボタル

4. 整備にあたって留意すべき事項

①鷺山風致地区指定

鷺山公園及びその周辺は、鷺山地区の重要な自然環境資源である鷺山の良好な自然的景観の保全及び周囲の市街地の都市環境の保全を図るため、右図の通り風致地区として指定され、保全が図られている。

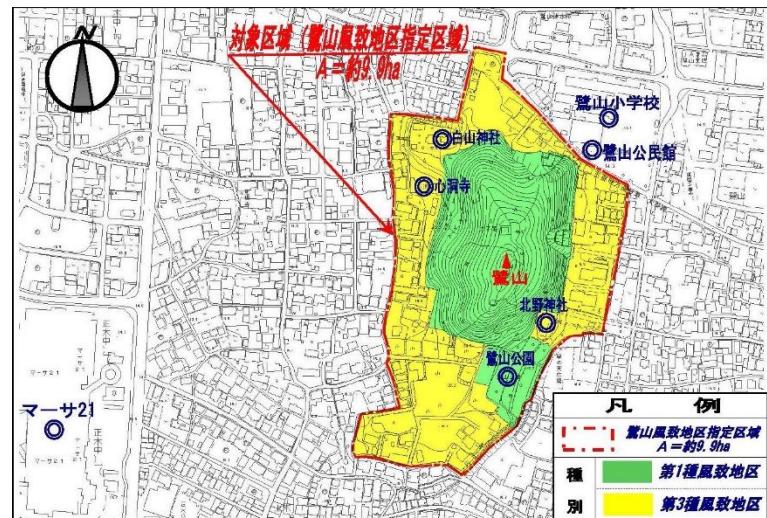


図 鷺山風致地区 指定状況

②土砂災害防止法に基づく指定及び急傾斜地崩壊危険区域の指定

鷺山公園及びその周辺エリアでは、土砂災害防止法に基づく急傾斜地を対象とした土砂災害警戒区域(イエローボーン)と土砂災害特別警戒区域(レッドゾーン)が指定されている。また、鷺山公園東側法面は、急傾斜地崩壊危険区域の指定を受けている。



図 土砂災害防止法による鷺山公園周辺の指定状況

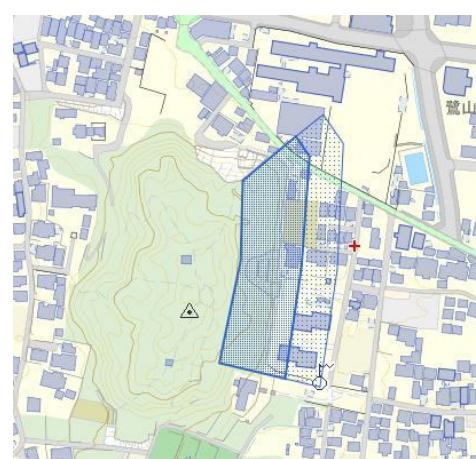


図 急傾斜地崩壊危険区域の指定状況

5. 鷺山公園の自然環境を活かした再整備コンセプト

季節と歴史を感じる『鷺山 学びの森』

鷺山公園がもっているストロングポイントとしては、①地域住民自らが整備したサクラ類やカエデ類によって彩られる季節を感じさせる景観や自然環境、②斎藤道三をはじめとした鷺山城址に関わる歴史資源の2点が挙げられる。この2点を基軸として小学生から高齢者までの幅広い世代が、いつまでも鷺山公園で活動し、学びを求めることができる場として活用することで、単なるレクリエーションの場から、**生涯学習の場としての活用を視野に入れた『鷺山 学びの森』というコンセプト**をもたせることで、鷺山公園を隅々まで活用したソフトを構築していく事で、重層的な学びの場を創出していくと共に、そのソフトの効果を最大限に引き出すハード整備もあわせて実施する。

6. 具体的再整備事項

再整備事項① 植栽されたソメイヨシノ等サクラ類の間伐及び剪定

鷺山公園内に植栽されたソメイヨシノをはじめとしたサクラ類は、その生長の中で徒長が目立ち、樹冠が非常に悪い形状となったまま、樹高のみが高くなっている。この様な樹冠のまま放置しておくと、春先につけるはずの花芽の数が明らかに減少すると共に、何れ個体としての生命力も失われていき、群落全体の枯死を招く恐れがある。そこで、立木密度が過密で、徒長したソメイヨシノ等サクラ類が植えられている箇所では、伐採率60%前後の間伐を実施し、残された個体の樹冠の改善が図られるように高層部の空間を創出していく事が求められる。また、必要な無い枝の剪定を行うことで、樹冠の形状の改善を促進し、残された個体の再生を図る。

実施対象エリア：サクラ維持管理重点エリア、サクラ間伐、剪定及び下層木除伐重点エリア

再整備事項② コナラ、アラカシ等広葉樹が分布するエリアの除伐、間伐作業の推進

鷺山公園の中でも最も広範囲に分布する樹種として、コナラ、アラカシ等広葉樹がある。この様な広葉樹が分布するエリアは、薪炭林として活用されなくなってから久しく、立木密度の状況、立木の生長に伴い、鷺山公園内の見通しが非常に悪くなっていると共に、四阿や尾根、散策路からの眺望を遮っている。この眺望の喪失は、岐阜城と金華山の位置関係の確認、長良川の変遷(井川、古川、古々川)を俯瞰的に確認し学ぶ場を喪失させており、『学びの森』というコンセプトを喪失させている要因の一つである。そこで、鷺山公園からの眺望を回復させるために、

1. 低木層の除伐、地拵えによる視野の確保
 2. 高木層の樹木を対象とした伐採率30%程度の間伐(特に常緑広葉樹を対象に)
- を実施し、鷺山公園の保有する眺望から得られる学習資源を復活させる。

実施対象エリア：サクラ間伐、剪定及び下層木除伐重点エリア、里山二次林再生エリア、ツブラジイ、アラカシ管理エリア、眺望、景観確保重点エリア(このエリアは更に伐採率を上げる)

再整備事項③ 親子連れから高齢者まで気軽に利用ができる遊歩道の整備

鷺山公園に生涯学習の視点に立った学びのコンセプトをもたせるためには、あらゆる世代の方が、気軽に利用できる遊歩道の整備が必要になってくる。鷺山公園として整備がされてから20年以上が経過

する中で、遊歩道の状況を精査すると、降雨等の影響による遊歩道面の侵食や、階段工・柵工の劣化・破損等が各所に見受けられる。特に高齢者の利用を視野に入れた場合、可能な限りユニバーサルデザインの考え方を取り入れれば、遊歩道の再整備が求められる。

実施対象エリア：全エリア

再整備事項④ 分布範囲が拡大しているモウソウチクの間伐

鷺山公園の東側法面、西側法面では、急傾斜地の土留め機能を期待して、モウソウチクが植えられている。しかしながら、現在では、モウソウチクのランナーの生長、それに伴う分布域の拡大の勢いが、人為的な管理伐採のペースより早いため、徐々のその分布域が拡大している。そのような状況の中、自生している立木がモウソウチク林に呑み込まれる形になっており、何れモウソウチクの影響による枯死が予想される。また、モウソウチク林の立木密度も高くなってしまっており、モウソウチク分布域の中央部ではランナーの生長が鈍くなり、本来期待される急傾斜地の土留めとしての機能が低下することも懸念される。そこで、モウソウチク林のランナーの生長を促すための立木密度の調整、尾根付近に自生する立木の保全を進めるために、モウソウチクの適切な間伐を推進する。

実施対象エリア：竹林管理エリア、里山二次林再生エリア、人工林管理エリア

再整備事項⑤ ヒノキ人工林の間伐及び枝打ちによる林内の光環境の改善

鷺山公園西側の裏面には、比較的広範囲にヒノキ人工林が分布している。このヒノキ人工林は、間伐、枝打ち等人工林に必要な管理作業が遅れており、ヒノキ人工林の林齢に対して、林床の光環境が非常に暗い状態のママとなっており、下層植生の発達が遅れている。この様なアンバランスな林相構造は生物多様性の側面からも改善が求められる。そこで、伐採率50%程度の間伐及び残された立木に対する枝打ちを推進し、ヒノキ人工林の林内の光環境の改善を図る。

実施対象エリア：人工林管理エリア

再整備事項⑥ 太子堂の撤去及び跡地利用の検討

鷺山公園北部の尾根にある太子堂は、基礎部の石積み、建屋の劣化が進んでおり、周辺の遊歩道利用者の危険因子の一つとなっている。そこで、氏子が主体となり地域住民の協力を仰ぎながら、太子堂の撤去を行うと共に、太子堂の跡地を鷺山公園利用者の休憩場等への整備を行い、鷺山公園の利便性の向上を図る。

実施対象エリア：休憩箇所整備エリア

再整備事項⑦ 『鷺山 学びの森』のコンセプトを具現化するためのソフトの構築

鷺山公園利用者が様々な視点から学びを得るために、鷺山公園から得られる情報が多種多様であることが求められる。そこで、1. 自然環境の学びの視点、2. 歴史の学びの視点から、それぞれ何が学べるのか把握した上で、利用者に届けるプログラムを構築していく事が必要である。学ぶプログラムとしては散策利用者自ら学ぶことを軸とした『セルフガイドプログラム』の考え方を取り入れて、講師等の指導がなくても、散策等鷺山公園を利用する中で学ぶことが出来るようプレゼンテーションや活用資料を工夫し、提供をしていく。

そのためには、

1. 鷺山公園に存在する植物、動物に関する情報のとりまとめ(調査)

2. 歴史関連の資料収集
 3. 調査結果を受けた上でのプログラムの検討
- を行い、学びのコンセプトを深めていく、プログラムの構築を行う。

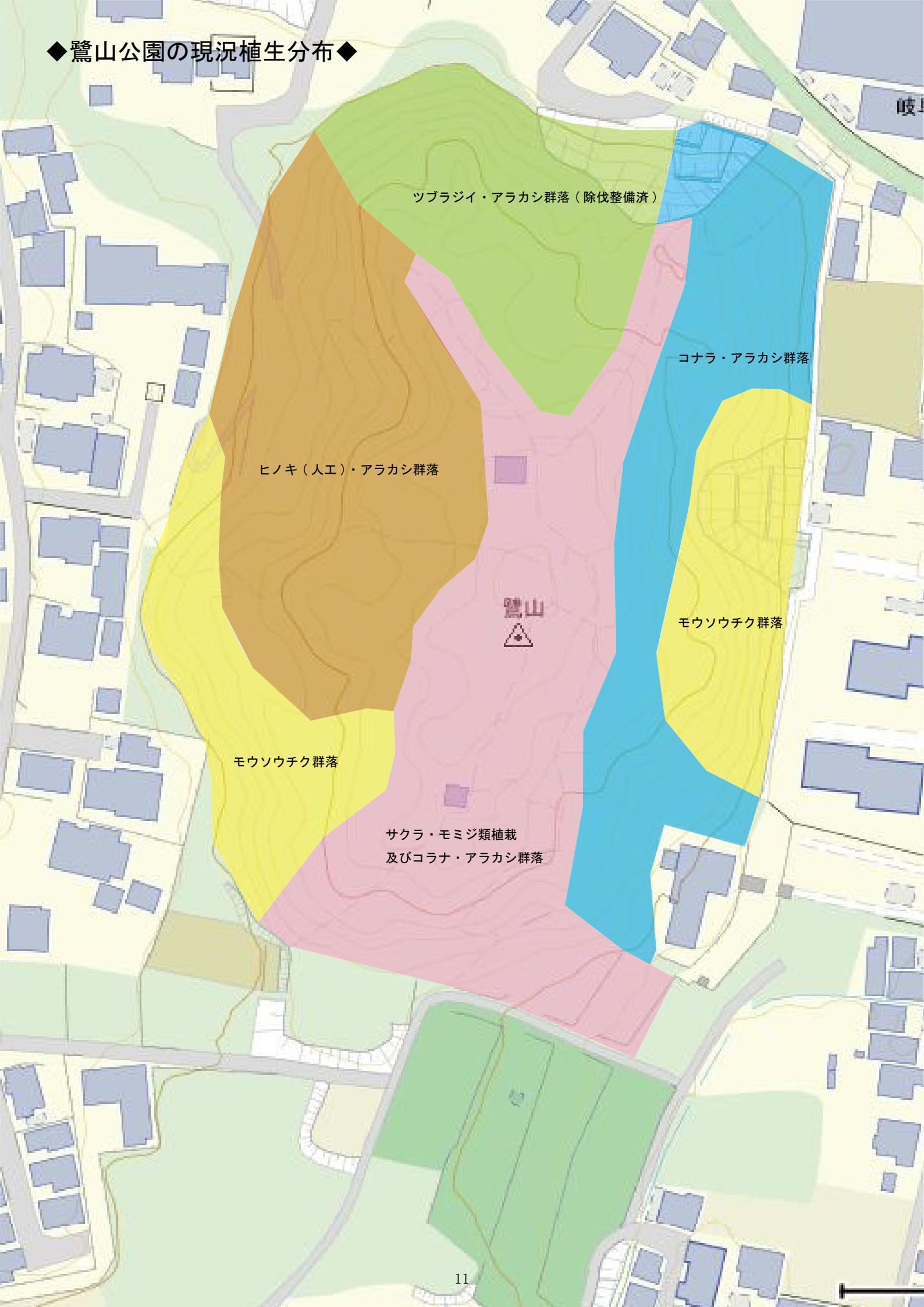
実施対象エリア：全エリア

再整備事項⑧ 季節と歴史を感じる『鷺山 学びの森』というコンセプトを維持するための市民活動の推進

コンセプトの具現化に向けて再整備を行った後に、日々生長する森林の維持管理を行っていく除伐、間伐等森林整備活動を進める市民活動を推進し、コンセプトを維持するソフト対策が必要であると共に、重層的な学びのプログラムを構築していく地域住民の知恵を披露するプログラムの創出が必要になってくる。この様な維持管理活動の延長で進めるものは、可能な限り地域住民を中心とした市民活動を中心に対象としていく。

実施対象エリア：全エリア

◆鷺山公園の現況植生分布◆



◆鷺山公園の自然環境を活かした再整備構想 平面図◆

